

## [音楽]

## 「音楽の楽しさ」を目的とした小学校音楽指導に関する一考察

- 学級担任が指導するメリットを生かした実践 -

鈴木 修治\*

## 1 はじめに

音楽科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」<sup>1)</sup>である。特に小学校では、児童が楽しく音楽にかかわり、音楽の喜びを味わいながら、基礎的な能力を培うことも示されていることを見逃してはならない。基礎的な能力を培おうとするには、児童の興味や関心、能力に応じた指導が意図的、計画的に行われ、その中で音楽の楽しさや喜びを味わえる学習展開がなされることが求められる。

教師は、誰もが「楽しい授業」をしたいと願っている。しかし、「楽しさ」を授業で求めるとき、どのように児童と音楽をかかわらせればよいのだろうか。宮下は「『楽しい授業』を求めているながら、けれども、それがどういう楽しさであり、どこからくる楽しさであり、音楽学習においてどういう意味をもつものかということなどが、深く吟味されてこなかった。」<sup>2)</sup>と指摘している。

笛木の調査では、「教師が日々の授業で心がけていること」で多かったのは「楽しいと感じることを大切に」という回答であった。<sup>3)</sup>ここで、笛木は「合唱や合奏といった活動を通して、音楽活動そのものがもたらす喜び以外の面、『友達と一緒に体験する』ことや『相手の立場を考え、全体の調和をとる』といったことなどに合唱や合奏の意義を見出している傾向があるように思われる。」と指摘している。<sup>4)</sup>また、児童が意欲的に取り組んだ授業内容では、「創作」「グループでの合奏」「遊び・ゲーム的な要素をもった活動」が挙げられている。<sup>5)</sup>

西園は、音楽における「楽しさ」を「音楽を認識したとき」「技能を習得したことによる楽しさ」「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」の3つにまとめている。そして、「音楽の授業における『楽しさ』は、常に音楽の認識、技能の習得、他者とのかかわりのなかで求めるようにしなければならない。」と述べている。<sup>6)</sup>

これまでの音楽科学習を振り返ると、小学校低学年の学習では、音楽が流れ出すと身体を揺らしながら歌うなど、自然に身体全体でリズムを感じ、表現する児童の姿が見られる。しかし、高学年になるに従い、表情が硬く、うつむき加減になる姿が多く見られる傾向にある。一因として、技能の向上を目指し、できるようになるまで繰り返し練習することが積み重なり、意欲がうすれていったことも指摘されるであろう。また、「グループ活動は児童が意欲的になる」「遊び・ゲームの要素をもつ活動は楽しそうだから、それでいい」ととらえ、活動ばかりが先行し、基本的な力が十分につかなかったことも指摘される要因といえよう。

「教師主導か児童主体性か」と言った対立的な考え方や、児童主体の美名のもとに指導がない放任授業や表面的な「楽しさ」で終わることがないように、どの児童にも「音楽は楽しい」と感じられる指導を行うことが重要であると考える。

## 2 研究の目的と方法

本研究は、授業における児童の観察や感想から児童の実態や変容をふまえて、音楽の楽しさを味わうための有効な指導の手立てを明らかにする。

また、これまでの筆者の経験では、音楽的技能等を考慮し、音楽科の指導を担当以外の教師が担当する機会が多かった。筆者は学級担任である。筆者は音楽が堪能ではないが、音楽科学習において、技能面だけでなく、児童の前向きな取組や心情の変容などを共感的に受け止めながら指導する存在として、年間を通して音楽を担当し、そのメリットについても考察する。

\* 能生町立南能生小学校（本論文は旧任教頭城村立南川小学校での実践研究である）

### 3 実践の構想と概要

「はじめに」でも述べたように、音楽の学習場面では高学年になるに従い、表情が硬く、うつむき加減になる傾向が見られる。特に歌唱ではその傾向が強い。そこには、高学年の発達段階として、友達から見られているという意識が影響したり、変声期になり声が出しにくかったりといった要因が考えられる。筆者は、本来、児童にとって生き生きと歌うということは大きな喜びを感じることであり、「音楽の楽しさ」そのものであると考える。

そこで、高学年の児童が和声の響きを感じながら、友達と合唱することにより、「音楽の楽しさ」を味わえるようにと考え、本実践「音の重なりやひびきを感じて歌おう」に取り組んだ。

本題材の目標は、声や音が重なり合う響きを感じて聴いたり、表現したりすることである。和音に関する学習を深めるとともに、和声の響きを感じ取りながら歌ったり、範唱CDや器楽演奏などから音の重なり的美しさを感じ取ったりする学習活動を設定した。児童がこれらの活動から、自分の歌声のよさや変化に気付いていくことによって、自信をもち、憧れを抱きながら、音楽や友達に主体的にかかわっていくと考えたのである。

「音楽の楽しさ」を味わわせるための手立ては次の4つである。

#### (1) グループ活動を仕組む

児童に意欲的に取り組ませるために手立てとして、グループ学習を取り入れた。学習の進め方(資料1)を提示し、学習の開始前にグループリーダーと教師が相談するようにした。また、それぞれの声部ごとの伴奏が録音されているフロッピーを準備し、自分たちで自由に活動できるようにした。問題となるのは、グループ編成である。今回は、13人と14人の2つのグループ編成を行った。指導計画の2次で3つの声部をそれぞれ歌った後、一人一人の希望をもとに、教師が意図的に編成した。

〈編成時に留意したこと〉

- ・学習活動をリードすることができる児童がそれぞれのグループに入るようにする。
- ・歌唱を好み、進んで活動に取り組む児童がそれぞれのグループに入るようにする。
- ・歌唱を苦手と感じ、活動に対して消極的になると予想される児童が2つのグループに分散するようにする。
- ・クラスの間関係を配慮し、安心して活動できる集団になるようにする。

#### (2) 聴き合う活動を仕組む

歌うためには聴くことが大事であると考え、歌いながら聴いたり、相手の音を注意して聴いたりするといった聴き合う活動を大切にした。

それぞれのパートが自分たちの声部を歌えるようになったとしても、実際の合わせてみるとなかなかハーモニーが作り出せない。他のパートに引っ張られたり、それぞれのパートのバランスが取れていなかったりと様々な原因が考えられる。そこで、自分たちの歌声をカセットに録音して聴いたり、それぞれの声部ごと・グループごとに聴き合ったりした。そうすることで、「こうすれば、もっとよくなる。」「ハーモニーがちょっと生まれていた。」などの音楽的な気付きが生まれ、児童相互の交流が可能になる。この交流によって、児童の音楽の感じ方が広がると考えた。仲間の声やピアノの音をよく聴くことによって、ズレを感じたり、合わせようとしたりすることで、音程が正しく取れるようになることを期待した。

#### (3) 多様な表現活動を仕組む

(2)とも関連するが、リコーダーは歌唱よりも音程が取りやすいので響きの感じがつかみやすい。また、歌唱・階名唱、リコーダー演奏と変化をつけて練習することで、自分のパートの音程を正しくつかみ、響きを感じていくようになる考えた。

#### (4) 基礎・基本をおさえる音楽遊びの活動を仕組む

音・リズム・音階・音の重なりなどの音楽的な要素に着目した遊びを音楽遊びととらえる。遊びには、心と体をほぐし、夢中になれるよさがある。手を握ったり、互いにタッチしたり、まねしたりといった児童同士のかかわりを深めることが、よりよい人間関係を築くことにもなる。「できた・できない」「うまくいった・うまくいかない」などを気にせず、誰もが安心してできる。自然と音楽をする構えがつけられる。

(資料1 学習の進め方カード)

**グループ練習ってこうやったら・・・**

フロッピーには、次のように入っています。  
パート1 高声部 パート2 中声部 パート3 低声部 パート4 伴奏

**出づ理かめよう。(基本の練習)**

それぞれのパートの音だけを流して、そのパートの人が歌う。  
他のパートの人はきく。  
よかったところをもう一度きくとよくなることを伝える。

**こまごまごまごま...**

こまごまごま	パート1	パート2	パート3	パート4
高声部をさらにうまく歌えない	○	×	×	○
中声部をさらにうまく歌えない	×	○	×	○
低声部をさらにうまく歌えない	×	×	○	○

**レベルアップしたいごまごま...**

こまごまごま	パート1	パート2	パート3	パート4
高声部をさらにうまく歌いたい。	○	○	○	○
中声部をさらにうまく歌いたい	○	○	○	○
低声部をさらにうまく歌いたい	○	○	○	○

すべてのパートの音を流して、そのパートの人だけが歌う。

**ハーモニーを生み出そう。**

2つずつのパートで合わせる。例えば、高と中、中と低など。  
伴奏とそのパートの音を流して、残りのパートの人が聴く。

5-1の方法  
みんなで合わせてみる。全部の音を流して、先生に聴いてもらったり、録音したりする。

5-2の方法  
伴奏だけ流して、みんなで合わせてみる。先生に聴いてもらったり、録音したりする。

特別な方法  
リコーダーで3つのパートを演奏する人と、歌う人を決めて楽しむ。

「ハーモニー」を強めよう!

学習計画は全7時間とし、下の表の通りである。

(表1 学習計画)

次	学 習 活 動
1次 (1時間)	○主旋律や前半部のマーチで弾む感じ、後半部のレガートでなめらかな感じをとらえる ・歌詞から、曲のイメージをもったり、範唱を聴いて曲想を感じたりする。 ・主旋律を歌唱する。
2次 (2時間)	○主旋律と中音部・低音部の重なりを感じる ・それぞれのパートの範唱を聴いたり、階名唱したりする。 ・3・4段目の各小節をリコーダーで演奏したり、歌ったりして3声の重なりを感じ取る。 ○リコーダーとの重なり ・リコーダーと歌唱を合わせる。
3次 (3時間)	○主旋律と中音部・低音部の重なり工夫 ・グループに分かれ、練習したり互いに聴き合ったりする。 ・グループ内で2パートずつ合わせたり、聴き合ったりする。
4次 (1時間)	○3部合唱 ・グループごとに発表する。 ・クラス全体で3部合唱する。

#### 4 実践の実際

児童と教師が見通しをもつことができ、安心して取り組めるように、1時間の学習活動の流れを次のようにパターン化した。

- \* 始まりの歌……クラスの音楽のテーマソングである「マイソング」を歌う。
- \* 始めの10分……ここでは先に述べた音楽遊びや発声のトレーニングをする。
- \* 主活動………本時のねらいを達成する活動を行う。
- \* 振り返り………今日の活動を振り返り、それぞれが意味付けをする。シートに感想を書いたり、教師に指番号で自己評価を伝えたりする。

先に述べた音楽の楽しさを味わわせるための手立てから見た児童の姿は次のようであった。

##### (1) グループ活動

これまでのトピック的題材「カデンツをつくろう」(3時間)でのグループ学習経験を生かし、それぞれのグループを3つの声部で構成した。

〈1時間目〉 まだグループ活動に慣れていない状態が見られたが、教師が学習を進め方のカードをもとに学習を進めるように助言した。それによって、一方のグループは、リーダーを中心に練習がスムーズに進められた。しかし、他方のグループは教師の助言が遅れたことで、学習への意欲が大きく減退してしまった。学習に消極的なS児は学習に対する興味を失い、教師が声をかけてもグループの輪から外れていた。1時間の振り返りのサインは「楽しくない」の1であった。同様にリーダーのU児も「楽しくない」の1であった。

そこで、次の時間までに、リーダーから困ったこと・よかったことを聞き、グループ学習の進め方カードの基本練習を始めにやること、音程をとるための機器操作担当者を決めることを確認した。

〈2・3時間目〉 響きを確かめながら学習を進めるため、自分たちのグループの合唱を録音することを伝えると「やだあ。」「やったあ。」などの歓声が挙がった。児童の意識の中には、もう一方のグループに負けられないという競争意識が働き、グループ内で3部合唱をつくり上げようと試行錯誤する姿が見られた。

- ・始めは、録音したものを聴くことに興味が集まったが、聴き比べて、「あおいほしのところは、中声部と低声部が弱い。だから、もう少し大きくしよう。」と違いを見つけ、次の練習に生かそうとする発言が見られるようになった。
- ・声部ごとに伴奏に合わせて歌ったり、2声部で合わせたりと練習方法も広がりが出てきた。
- ・リーダーだけではなく、音楽を得意と感じている他の児童が練習の方法を指示したり、機器操作担当でない児童が

音量調節をしたりして、協力する姿が見られた。

- ・特に2時間目に少し響きがうまれてきたAグループは、「もう一度やろう」、「『それは』のところハモッてたよ。」のつぶやきが聴かれた。

1時間目に「楽しくない」と自己評価したリーダーのM児は、活動でみんながアドバイスを出してくれたことに満足感を味わった。

(資料2 リーダーM児の感想)

グループ練習で最初はみんなとあわせるのが大変だったけど、いろんなアドバイスをし合っ上手にできてうれしかった。

(資料3 参加観察者の感想)

オルガンの使い方にも慣れ、グループ学習の方法も分かってきたように思います。何よりも児童たちが前向きでした。Yさん、やる気満々でした。Oさん、Nさん、音程バッチリでした。

(2) 聴き合う活動

a. 範唱CDを聴く段階

3部合唱のきれいなハーモニーを感じることができた。「それは地球」の歌詞の意味や歌に込められた願いを演奏全体から感じていた。「この曲のどこが一番気に入りましたか。」の問いに「それはちきゅう みんなのほしよのところ。」「それはちきゅう あおいほしのところ」と3部合唱になっているところを選んだ児童が多く、その理由は、「美しい感じがする。」「盛り上がっている。」であった。2回目に聴いたときは、自然にリズムに合わせて身体を揺らしたり、歌詞を口ずさんだりする児童がいた。

b. リコーダー合奏を聴く段階

リコーダー合奏を通して、きれいな響きを聴きとることができた。

c. 自分たちの歌声を聴いて、練習する段階

数名の男の子は、音程が正しくとれないという実態であった。その児童に対して、グループ活動のときは、音程のしっかりした児童の側へ移動したり、教師が側で音程に合わせてハンドサインをしたりした。また、授業開始前にピアノの音を聴いて、同じ音程の音を出す練習をしたり、階名唱で自分のパートを歌ったりし、少しではあるが正しい音程で歌えるようになっていった。合唱がどうだったかを児童同士でアドバイスする場面は、音量や音程に関する指摘が多く出された。ハーモニーについて、始めはなんとなく響き合っていたと感じる程度であったが、「今日はぜんぜんハモッていなかったから、楽しくなかった。」といった発言が出るなど、次第に音程が合っているか、響きがいかに聴く力が育っていると実感した。

(資料4 参加観察者の感想)

今日のような互いに聴く活動の積み重ねが、児童の聴く耳を育てますね。先生もそう思ったんだという反応は、自分もちょっと3部ではないと感じているよ、どうしたらよくなるかなという意思の表れであると思います。きれいな3部合唱ができるようになることを期待していることが伝わります。

(3) 基礎・基本をおさえる音楽遊び

各時間の始めの10分で基礎・基本をおさえる音楽遊びの活動を年間を通して行ってきた。

① リズムリレー

あるリズムを一定のテンポで流し、リーダーのこぼや動作を見たり聴いたりして、声、リズム、身体の動きなどをまねする。音楽の流れにのる力や集中して聴く力が養われる。

② 魔女の笑い声<sup>7)</sup>

「イーヒッヒッ。」と魔女の笑い声や「ホー、ホー。」とフクロウの鳴き声をまねる。のどの奥を開ける感じをつかみ、頭声的発声へつなげることができる。

本実践では、学習内容との関連を図り、主に次のような3つ音楽遊びを取り上げた。

- ③ 「和音クイズ」はI度 IV度 V度の和音を聴いて、答えを身体で表現する。まず、教師がピアノで3つの和音を弾いて、響きの違いを確かめる。そして、1音ずつ重ねていったり、一斉に3つの音を弾いたり、1音ずつ弾く順序に変化をつけたりした。クイズ形式で、繰り返す中でだんだんと聴き分けられるようになっていった。

- ④ 発声練習として、なじみのある曲を八行で歌う「おなかの体操」は、オルガンの移調機能を使い、頭声的な

発声や声づくりを楽しみながらできるようにした。また、テンポを変えたり、最後の音を伸ばしたりするなど変化を付けながら行うことで飽きずに取り組むことができた。音程が下がる場合は、教師がハンドサインをしたり、児童には胸の前で手を水平にして音が下がらないように意識させたりした。

- ⑤ 手遊び活動は、手遊びをすることで拍の感覚や友達との身体的なコミュニケーションを図ることをねらった。始めは、なかなかペアが見つからなかった児童も慣れるとすぐにペアが決まり、友達との関係がよくなっていくことが感じられた。

(資料5 参加観察者のメモ)

始めの頃よりも声がきれいになってきました。表情も柔らいできました。NさんやKさんRさんは自然と体が揺れていますね。  
また、音楽遊びの後から、ほんわかとした雰囲気になりました。

(資料6 参加観察者のメモ)

動作を伴う活動は、体を動かせばなんでもいいというのではない。誰にでもできると考えやすい。しかし、意外にズレることも拍を学ぶ意味がある。今回は、2回目ということもあり、慣れがあり、拍を感じる余裕があった。

## 5 結果と考察

本実践での児童の姿や参加観察者のメモ、そして筆者の児童と共に同じ空間で活動しながら感じたことをもとに、「音楽の楽しさを味わわせるための手立ては有効であったか」「学級担任が担当するメリットは存在したか」の2点について考察する。

### (1) 音楽の楽しさを味わわせるための手立ては有効であったか

- ① グループ活動では、児童が自分たちでカードを参考にしながら練習方法を考えて、友達と一緒に活動する喜びを味わったと考えられる。そこでは、互いにアドバイスしたり、協力したりする姿が見られ、児童同士のかかわりが広がり、自分たちで活動を進めることができた。時々目を合わせて歌ったり、仲間から「きれいだった。合ってたよ。」と言われて喜んだりする表情から、他者とかかわりによって生まれる楽しさを味わうことができたと言える。
- ② 多様な聴く活動を繰り返すことで、聴く力を付けることができたと考えられる。練習のとき、「今日はぜんぜんハモっていなかったから、楽しくなかった。」と発言したG児が、発表会のとき「今日は、多分ハモっていたよ。」と自分たちの歌声の変化を感じていた。  
また、聴く力が育つことによって、また、友達の声に注意して聴くようになった。自分の音程が合っていないことに気付くこともあった反面、自信をもって、安心して歌う場面も見られた。児童がグループ活動等を通して、音程を正しく取るという技能を習得するための手立てが不十分で、児童のグループ活動が停滞していると感じた場合は、教師中心に声部ごとに旋律を確かめたり、音程の正しく取れる児童と取れない児童をペアにし練習したりするなどの指導を時機を逃さず行うことが大切である。教師の授業前などの短時間の指導によって、少しずつ音程が取れるようになり、落ち着いて歌うことができた。
- ③ 音楽遊びでは、閉じた児童の心と体を解きほぐす「準備運動」の役割を果たしている。手を握る、タッチするなど、友達とのスキンシップがとれ、友達とのコミュニケーションが苦手だった児童も休み時間に友達と電子オルガンを弾いたりするといった姿が見られるようになった。また、発声練習では単に繰り返すのではなく、変化のある繰り返し、立ち方・姿勢・口形などポイントをおさえた教師の言葉がけや声のイメージを身体の動きで伝えることによって、児童が「自然でやわらかい歌声」を出すコツをつかむことができた。そのことは、参加観察者の「統一感がある声が出てきている。」「歌声がとてもきれいで、自信をもって歌えるようになってきている。」などの記述からうかがうことができる。音楽遊びによって、音楽の基礎・基本が身に付き、音楽の楽しさを味わえることが確かめられた。

### (2) 学級担任が担当するよさは存在したか

学級担任は、児童一人一人の今の状況を音楽科以外の学習時間の様子を含めて理解し、児童にかかわっていくことができる。児童は信頼関係が築かれている担任には、心の抵抗感が少ない。苦手意識をもっている児童には、一緒に歌ったり、「少し声が出てきたね。」「きれいな声だね。」と励ましたりすることができ、意欲の喚起や持続の面で効果的であった。

また、学級の間人間関係が安定しているときは、音楽の授業で安心して歌ったり、演奏したりできるが、その逆の場

合はどんなに音楽が好きでも安心して表現ができない。担任は、音楽科の授業を担当することで、児童の様子から個々の児童理解を深め、授業での児童の様子から学級づくりを見直すことにもつながった。

音楽科での授業に関連させて、朝の歌の選曲をしたり、他教科の学習が早く終わったときに、音楽の時間にもう少しやりたいと思った活動をしたり、児童に支援したりすることができた。その中で、ちょっとした児童の伸びを認め、時機を逃さず、ほめることができた。それが、次の活動への見通しをもたせ、意欲を高めることとなった。

児童の学校生活にも、音楽に親しもうとする姿が現れてきた。学級集会活動のプログラムやグループの発表に音楽的な内容が見られようになった。また、休み時間にも音楽を流したり、教師自身がリコーダーを演奏したりするなど、教室に音楽があふれる環境づくりができた。

## 6 おわりに

音楽科の授業において、楽しさの追求が自由気ままな音遊びのみにならないように、児童が「音楽の楽しさ」を味わう手立てを確かめた。児童は他者とかかわりながら活動し、その中で技能を習得し、音楽の美しさを感じ、「音楽の楽しさ」を味わっていた。それがさらに、「音楽の楽しさ」を追求していこうとする主体的な姿につながっている。これからも、児童が音楽とのかかわりの中から、「音楽の楽しさ」を感じられるような指導の手立てを探り続けていきたい。

教師は、授業において一つの人的な環境である。1学期、一人の児童から「先生、もっと音楽の勉強したほうがいいよ。」と言われた。その児童が本実践の後、「先生、ちょっと音楽が楽しくなったよ。」と言ってくれた。筆者は、正直「音苦」であったが、真に「音楽」と感じることができた。

求められる児童の姿は求める教師の姿である。当たりまえのことを当たりまえにやっていくことである。これからも児童とともに「音楽の楽しさ」を味わっていきたいと考える。

### 〈引用文献〉

- 1) 文部省『小学校学習指導要領解説 音楽編』 1999 p.8
- 2) 日本学校音楽教育実践学会編 『音楽の授業における楽しさの仕組み』 音楽之友社 2003 p.9
- 3) 笛木晶子「児童の学びの意欲を満たす小学校音楽科授業の研究—子供・大学生・教師の実態調査を踏まえて—」  
上越教育大学大学院修士論文 2003 pp.42-43
- 4) 笛木 前掲書3 p.16
- 5) 同上 p.35
- 6) 前掲書2 p.147
- 7) 上越音楽教育研究会 「第36回 音楽教育指導者研修会」 2002 富澤 裕

### 〈参考文献〉

- 頸城村立南川小学校 研究紀要 「かがやくひとみをもとめて」 2003